

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：31203

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13872

研究課題名（和文）体育の学力形成論に関する日米調査研究

研究課題名（英文）A study on the theory of academic achievement in physical education: Comparison between Japan and America

研究代表者

徳島 祐彌 (Tokushima, Yuya)

盛岡大学・文学部・助教

研究者番号：00819443

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、体育科の学力を保障するカリキュラムを開発することである。主として、アメリカにおける体育のスタンダードの議論と、日本における体育の学力と評価の研究を検討した。研究成果としては次の3点がある。（1）従来の日本における体育の学力研究において、対象と構造の不明瞭さについて考察したこと。また、体育の評価の議論とパフォーマンス評価の関係を検討したこと。（2）フィジカル・リテラシーという概念や、アメリカで開発されたスタンダードを取り入れる重要性を検討したこと。（3）学力論と評価論を踏まえてカリキュラム・オーバーロードを解消していくことの必要性について検討したこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義・社会的意義は主に次の2点である。

（1）AIやICT活用が注目される現在の学校教育において、体育の学力形成論を問い直すことによって、身体教育の在り方を再検討するための基礎的な研究を行ったこと。  
（2）スポーツの多様化と科学化に伴って生じるカリキュラム・オーバーロード（内容が過多になること）の問題に関して、体育で育成する学力という視点から検討するための基礎的な研究を行ったこと。

研究成果の概要（英文）：The study aims to develop a curriculum to improve academic achievement in physical education. I primarily examined physical education standards (USA) and research on academic achievement and assessment in physical education (Japan).

The research results are as follows: (1) Consideration of the ambiguity of object and structure in traditional research on academic achievement in physical education in Japan. Furthermore, I examined the relationship between the discussion of physical education assessment and performance assessment. (2) Considering the importance of utilizing the concept of physical literacy and standards in the United States. (3) Considered the importance of solving the problem of curriculum overload based on academic achievement and assessment theories.

研究分野：教育方法学

キーワード：体育 アメリカ カリキュラム 学力

## 1. 研究開始当初の背景

2000年代(後半)以降の教育改革は、コンピテンシー・ベースの教育改革と特徴づけられる。コンピテンシー・ベースの教育改革とは、批判的思考や問題解決といった高次の認知的スキル、コミュニケーションや協働といった社会的スキル、自律性や協調性といった人格特性・態度などの育成を軸とした教育改革を指している(石井、2015、pp.4-9)。このような様々な資質・能力を育てることは重要である。しかし、それらのスキルや諸能力だけを取り出して直接的に育成することができるのか、学習活動が形骸化し、教科内容の学びが浅くなってしまっているのではないかという疑問がある。そこで、教育内容の学びとコンピテンシーの育成を対立的に捉えるのではなく、深い学びを実現するという形で捉えることが大切になると考えられる(Cf. 徳島、2021b)。

このような動向は、教科の一つである体育科においても課題となると考えられる。さまざまな運動・スポーツを扱い、子どもたちが運動することを通して学習する学校体育は、心身の関係を対象とした教育活動として重要な位置を占めてきた。しかし、コンピテンシー・ベースの教育改革の流れの中で、体育科の役割があらためて問い直され、体育カリキュラムの再構成が課題とされている(Cf. 友添、2014)。そこで、今後の体育カリキュラムを考えるにあたり、体育科で目指すべき目標や育てるべき学力について検討し、それらの学力を確かに育てていくためのカリキュラムと評価の在り方についても考える必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代において、「体育で目指すべき学力とは何か」「どのようにその学力をカリキュラムのレベルで保障するのか」という問いを追究し、今後の展望を見出すことである。そのために本研究では、アメリカにおける体育カリキュラム論および「スタンダードに基づく体育」の展開と、日本における体育の学力論および到達度評価研究の展開に着目した。

アメリカにおける「スタンダードに基づく体育」は、体育科のスタンダードに示された成果を踏まえて体育カリキュラムを構成し、スタンダードに示された成果の達成を重視するものである。そうすることで、幅広い目標でいずれも達成できないような状況でも、狭い目標で一面的な体育の授業を実施するのでもない、成果の保障が目ざされている。

日本における体育の学力研究は、主に体育科教育の研究者によってなされてきたものであり、体育の実践の方向性を考える際の指針として検討されてきた。また体育の到達度評価の研究では、学力の保障を重視し、到達すべき目標を明確にした単元開発と授業づくりを重視してきた。

これら日米の研究は、体育の成果や学力とは何かを明らかにするとともに、その成果や学力を保障するような体育実践を目ざすという点で大きく共通している(ただし、特に体育の学力論についてはいくつかの立場があり、一概には言えない)。他方で、それぞれの研究や理論は、カリキュラムレベルと授業レベルの違いや、学力の捉え方の違いなど、相違点も見られる。そこで、これらの研究の蓄積を整理し、両者を統一する理論を構築することは、学力の問い直しを踏まえたカリキュラム開発にとって重要な課題になると考えた。

あわせて、これらの研究成果を踏まえつつ、新たに体育カリキュラムを構想していく際の方法として、「逆向き設計」論(後述)に基づいた体育カリキュラム開発の可能性を検討することによって、今後の展望を見出すこととした。

## 3. 研究の方法

研究開始当初、研究の方法としては、文献調査、アメリカでのフィールドワーク(授業観察とインタビュー調査)、日本の学校との共同研究等を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、フィールドワークおよび学校との共同研究等が難しい状況になったため、主として文献調査を中心に行った。文献調査の方法としては、これまでの体育に関する研究成果の蓄積を中心に整理しつつ、体育科以外のカリキュラムと学力・評価に関する議論を押さえながら、今後の体育カリキュラムの課題について検討した。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、(1)「スタンダードに基づく体育」を中心とした、アメリカにおける体育カリキュラム論の検討・整理、(2)日本における体育の学力と到達度評価に関する研究の検討・整理、(3)「逆向き設計」論に関する体育カリキュラムの検討・整理、(4)日本の体育カリキュラムに関する現状と課題の4点に区別される。

(1)アメリカにおける体育カリキュラム論の検討としては、まず、体育のスタンダードを含め、体育カリキュラム論の展開を総括的に整理した。具体的には、フィットネス教育やスポーツ教育、「スタンダードに基づく体育」などの立場について、個別の教育的価値に依拠した体育カリキュラム論と、教育的価値を包括的に捉える体育カリキュラム論の系譜に整理した(徳島、2021a)。その成果をもとに、1960年代以降のアメリカにおける体育カリキュラム論の系譜を図示した。これらの検討を通して、スタンダードに示された成果を保障していくためには、多様なモデルを

組み合わせる必要があることと、それらのモデルを単に組み合わせるのではなく、それぞれの依拠する教育的価値を踏まえて捉えなおしていくことが重要であることを考察した。

また、アメリカのスタンダードにおいて目指すべき姿として言及されている「フィジカル・リテラシー（身体リテラシー）」という概念について検討した。この概念は一般に、生涯にわたる身体活動への参加のための知識や能力、自信を持つことを指している。これはアメリカだけでなく世界的に注目されている概念であり、学校体育を超えた運動・スポーツの指導で注目されている。一方で、アメリカのスタンダードを含め、フィジカル・リテラシーの概念は多義的に解釈されることもあり、その意味内容については今後の検討が必要である。このフィジカル・リテラシーの概念について、日本の先行研究を踏まえつつ、日本の学校体育にどのような示唆を得られるのかを検討し、近代的なスポーツを重視する体育の転換にとって示唆的ではないかということを確認した（Cf. 三上、2021；杉浦・樋口、2021）。

（2）体育科の学力論に関して、これまでの流れを整理した研究がある（内海、1984；高橋、1989；岩田、2017 など）。これらの研究を踏まえると、特に2000年代以降の学力論議において、体育科教育では十分な議論の蓄積がなされていないことがうかがえる。そこで、2000年代以降の一般的な学力・能力の議論に基づいて、体育科の学力を再検討する課題が浮かび上がると考えられる（（4）へ）。体育における到達度評価に関する研究もまたなされてきた（全国到達度評価研究会、1997 など）。その成果を検討したところ、学習指導要領等の制約があり、単元づくりや授業づくりを中心とした議論になっていること、また、現代の子どもたちの身体の状況と運動・スポーツに関する学問の進展から考えて、教育内容を再検討する必要があることを考察した。加えて、体育科におけるパフォーマンス評価（個別の知識・技能だけでなく、それらを総合して使いこなすパフォーマンス課題などの評価方法）を模索することの重要性を改めて確認した。これまでの日本の議論を踏まえて、目標づくりをしていくことによって、体育科の学力を実質的に保障することや、スポーツにかかわる権利との関係で目標を設定していくことが重要であることを整理した。

（3）「逆向き設計」論に関する体育カリキュラムの検討・整理に関しては、「逆向き設計」論そのものの再検討と、体育カリキュラムに対する示唆について検討した。「逆向き設計」論とは、教育目標、評価方法、学習経験と指導の計画の3つを一体的に設計するカリキュラム設計の方法とされている（西岡、2016、p.21）。「逆向き設計」論の検討としては、その主要な論者であるウィギンズらの理論について、「本質的な問い」、パフォーマンス課題、ループリックなどの目標と評価に関する考え方を検討した。また、アメリカの体育において、ウィギンズらの「逆向き設計」論がどのように参照されているのかについて確認した。加えて、教科指導における体育の意義について、「逆向き設計」論を踏まえて検討した。まず、教科指導の議論において資質・能力が重視されてきたことや、アクティブラーニングの変遷について整理し、「深い学び」という視点の重要性を確認した。そのうえで、各教科の「見方・考え方」が重要であることや、「真正の学び」という視点で体育の授業を捉えなおすこと、そのために「本質的な問い」を用いたカリキュラム設計が重要であることなどを考察した（Cf. 徳島、2021b）。

（4）（3）の研究と関連して、日本の体育カリキュラムの現状と課題について検討した。具体的には、2010年代以降に盛んに議論をされているコンピテンシーの育成や、次の学習指導要領改訂に関して指摘されているカリキュラム・オーバーロードの問題（教える内容が過多になり、子どもや教師、学校に負担がかかること）などを踏まえて整理した。結果として、体育においてもオーバーロードの問題が起こりうること、コンピテンシー育成の流れから学ぶべきものがあること、特に「概念」などを軸として体育カリキュラムを構想していくことの重要性について考察した。また、新たに学力を形成していくカリキュラムを考えるにあたって、近年の国際バカロレアにおける取組などに学ぶとともに、従来のスポーツ教育の理論から学ぶなど、何を参照すべきかについて検討した（Cf. 徳島、2022）。

#### （5）本研究の成果の総括と今後の課題

本研究の成果の総括として、次の2点を挙げるができる。1点目は、体育における学力論および到達度評価研究の蓄積と、パフォーマンス評価論などの動向との関係について考察したことである。2点目は、具体的なカリキュラム設計の方法論として、「概念」に注目する必要性などを確認しつつ、体育科における「逆向き設計」論の有効性について考察したことである。

以上の研究を踏まえて、今後の課題としては次の3点を挙げるができる。1点目は、これまでの学力研究と接続しながら、今求められる体育の学力をより理論的・実践的に再構想する課題である。その際には、スポーツにかかわる権利とフィジカル・リテラシーという視点が重要になると考えられる。2点目は、体育にかかわる諸科学と、体育カリキュラム論との関係を問うことである。（4）で検討したようなオーバーロードにならない体育カリキュラムの在り方を構想するためには、内容の精選と構造化が重要になると考えられ、その内容を設定するための論理を追究することが必要になると考えられる。3点目は、新たな体育カリキュラムの構成について、実践レベルで追究していくことである。

<参考・引用文献>

- 石井英真（2015）『今求められる学力と学びとは』日本標準。
- 岩田靖（2017）『体育科教育における教材論』明和出版。
- 内海和雄（1984）『体育科の学力と目標』青木書店。
- 全国到達度評価研究会（1997）『シリーズ 体育 目標づくり・授業づくり』あゆみ。
- 高橋亮三編（1989）『体育科教育の学力』第一書林。
- 徳島祐彌（2021a）「アメリカにおける体育カリキュラム論に関する研究」(京都大学 博士論文)。
- 徳島祐彌（2021b）「いま、教科指導の意義を考える」『体育科教育』2021年10月号、pp.16-20。
- 徳島祐彌（2022）「体育授業を巡るカリキュラムの研究について」『現代スポーツ評論』(47)、pp.118-125。
- 友添秀則（2014）「学校カリキュラムにおける体育領域の位置と役割」『体育科教育学研究』30(2)、pp.65-72。
- 西岡加名恵（2016）『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化。
- 三上純（2021）「Margaret Whitehead による『身体リテラシー』概念の検討」『スポーツ教育学研究』41(2)、pp.35-48。
- 杉浦雄策・樋口倫子（2021）「不確実な時代における身体活動の意義を問う」『日本保健医療行動科学会雑誌』35(2)、pp.15-22。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 徳島祐彌	4. 巻 69巻10号
2. 論文標題 いま、教科指導の意義を考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳島祐彌	4. 巻 47号
2. 論文標題 体育授業を巡るカリキュラムの研究について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代スポーツ評論	6. 最初と最後の頁 118-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西岡加名恵, 石井英真編著（徳島祐彌分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 262
3. 書名 教育評価重要用語事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------